

苦境に陥った時、ただ慌てふためいては打開の妙手は生まれません。活路を見いだすには、冷静に現状を受け止め、時に視点を換えることも必要でしょう。

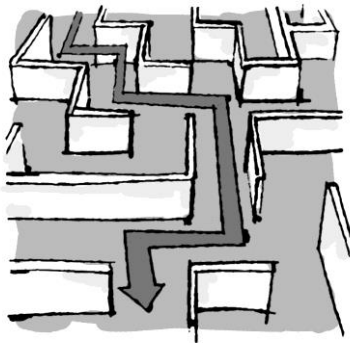
経営には波があります。およそ事業というものは、成功と失敗、好不調というリズムをもって進んでいきます。大切なことは、苦境に陥った時、そこからつながる成功をどうやって手繰り寄せるかにあります。

そのポイントは、①冷静に現状を受け止める、②時に視点を換えるということでしょう。

インソップ寓話に「カラスと水差し」という話があります。長い旅をして、喉が渴いていたカラスが水差しを見つけてきました。しかし、水は底に少ししか入っていません。しかも、くちばしが水に届かないのです。

あらゆる手段を講じて水を飲めず、万策尽きた時、カラスはある名案を思いつきます。それは、小石をくちばしでつまんで、水差しの中へ落としていくことでした。すると、中の水はどんどん嵩（かさ）を増して、ついにくちばしのところまで届いたのでした。こうしてカラスは喉を潤し、また旅に出ました——というお話です。

おそらく、水差しを壊したり、動かしたり、その形状といった外面にだけ視点が向かっている間は、名案は浮かんでこなかったでしょう。困難な状況に陥った時、私たちは、先のカラスと同じように、問題の外面と形状だけに目がいくことが多いのではないのでしょうか。



2月のテーマ | 活路はどこに

困難 打開の妙手は 自分の中にある

「活路」を「どこに」と外に求めている間は、なかなか活路は見いだせません。倫理経営では、自らの力ではどうすることもできない外部要因（たとえば、景気や時代の変化、また、他社の動向）ではなく、視点を内側に向けます。その目は、他社から自社へ、社員から自分へ、さらには、会社から自らの家庭にも及びます。

倫理研究所が発行する月刊誌『新世』には、毎月、倫理経営の体験談が掲載されますが、すべての体験報告者に共通するのは、この視点の転換があることです。

資金調達、社員との確執、二代目社長の苦悩など、人を恨み、親を責め、相手を非難している間は、状況は改善するどころか、悪化の一途を辿るのみ。そこから転じて、ひとたび自社と自分自身の心を見つめ直した時、かつ然と活路が開かれます。

そして、取り除こう、解決しようとしていた、当の苦難自体が、会社を向上せしめる種であり、活路そのものであったことに気づいていくのです。

一見不幸のごとく見える事は、それは実は、幸福への入口を「ここだぞ」と示している。ただ、その門は閉ざされている。思いきって、たたけ、押せ。しかれば、さっと開かれよう。（丸山敏雄著『人類の朝光』）

迫り来る苦難は幸福の入口。救いを「どこに」と求めたくなったら、視点を自社と自己に向け直し、苦境のただ中になれば、それは「幸福の門」であると口ずさんで、閉ざされた門を思い切っって開いてみましょう。